

# ゴールドハーゲン論争再考

## —アメリカにおける議論との比較から—

佐藤 大 輔

### はじめに

1996年～1997年にドイツ及びアメリカのメディア上で展開されたいわゆる「ゴールドハーゲン論争」は、同時期の「国防軍犯罪展」や「ホロコースト記念碑論争」と並んで、ドイツが「戦う民主主義」の伝統を堅持することを決定付けた歴史認識問題関連の重要な出来事の一つに数えられている。この論争は、とりわけホロコースト研究の泰斗から若手研究者まで様々な論者が参加し、映像メディア等での展開による影響力の大きさと一般視聴者の多さ、関心の高さによって、米独におけるホロコースト研究に重要な転換点をもたらしたのみならず、統一後間もないドイツの政治文化において、多くの人にドイツが進むべき道について考えさせた多大な、そして有意義な効果を発揮した論争として認知されている。当時発表された論評を集めた代表的な論集としては Schoeps (1996)<sup>(1)</sup>や Heil/Erb (1998)<sup>(2)</sup>, Shandley (1998)<sup>(3)</sup>がある。

ゴールドハーゲン論争は日本でも詳しく紹介・考察がなされており、ホロコースト史学史やドイツ社会史においては研究史上の標石となりつつある。同時代の詳細な紹介や論考には大石 (1997)<sup>(4)</sup>や佐藤 (1997)<sup>(5)</sup>のものがあリ、現在に至るまで歴史学・社会学・政治学の多様な研究者によって考察がなされている。当初は極めて学術的水準が低いとされていたゴールドハーゲンが結果的にはホロコースト研究に重要なパラダイム転回をもたらしたとする小野寺 (2008)<sup>(6)</sup>, さらに論争をホロコースト研究内の方法論的問題に留まらない大きな影響力を持った出来事として捉えた考察に仲正 (1998)<sup>(7)</sup>や芝 (2008)<sup>(8)</sup>, 岡野内 (2008)<sup>(9)</sup>等がある。ゴールドハーゲン論争の経緯やその原因及び様々な影響については、上記の先行研究、とりわけ大石と仲正の論考に詳しい。

ところでこれらの論考はそれぞれ深く貴重な知見を提供しているものの、ある面において共通する特徴を有している。それはゴールドハーゲン論争において、その中心人物となったダニエル・J・ゴールドハーゲンが最もリベラルな論客の一人でも最もラディカルな論客の一人であり、その著作『普通のドイツ人とホロコースト』<sup>(10)</sup>の学術的水準はともかく、そこにおいて彼が発した問題提起は意義のあるものであったという認識である。彼の政治的意図への疑義は論争初期に右派・保守系論客から反ドイツ報復感情やドイツ国内対立の扇動であるとして盛んに表明されていたものであり、そのような左右の構図の帰結として上記のような共通認識が形成されてきたことは必然といえる。

しかし論争当時からの構図にあてはめることのできない論者もいた。本稿では、そのような特に

他と異なる論評を行った人物のうちヴォルフガング・ヴィッパーマンとノーマン・G・フィンケルスティンを取り上げる。また、論争以後のゴールドハーゲンの論を整理し、それらの言説を手掛かりにゴールドハーゲン論争の再考を試みる。これによりドイツにおけるホロコーストをめぐる議論の特色を再確認し、アメリカでの議論からもゴールドハーゲン論争およびゴールドハーゲンを位置付け、更には独米それぞれのホロコースト議論の特性と両者の関係性を探ることが可能になると期待される。

## 「ポライモス」研究者ヴィッパーマン

ベルリン自由大学教授のヴィッパーマンは、ドイツにおける歴史修正主義を総覧してゴールドハーゲン論争の意義を説いた著作『議論された過去』<sup>(11)</sup>、『ドイツ戦争責任論争』<sup>(12)</sup>を有するホロコースト研究者である。歴史家論争の火種を撒くことになるエルンスト・ノルテのもとで学び、比較ファシズム史や、「ツイゴイナー」（シンティ・ロマ）に対するホロコースト（ロマ語でポライモス Porajmos と呼称する）を専門とする。

彼はホロコーストという現象は空前絶後のものであり他のジェノサイドとは比較できないと主張しているが、それはホロコーストがユダヤ人という単一の集団に対する絶滅政策であったためではない。彼はポライモス研究者として、被害者があたかもユダヤ人のみであったかのように語られることに同意せず、ゴールドハーゲンにもその点で批判を加えている。「『ユダヤ人』だけがナチスの人種殺戮の犠牲者となったのではない、という事実は無視されている」。「この点で、彼は明らかに十分急進的とはいえない」<sup>(13)</sup>。

シンティ・ロマの地位回復の訴えは90年代に至ってもユダヤ系論者・機関からさえ否定的に受け止められてきた。ヴィッパーマンにとってのホロコーストの比較不能性は被害者の多様性にこそ裏打ちされたものであり、これはベルリンのホロコースト記念碑をめぐる論争<sup>(14)</sup>の流れを汲むものでもある。あらゆる少数派への絶滅政策として、ホロコーストを異質で比較不能と捉えるヴィッパーマンのホロコースト観は、ユダヤ人への加害行為のみに議論が集束しがちなゴールドハーゲン論争において貴重な役割を果たしたといえよう。彼にとって、ホロコーストをユダヤ人とドイツ人の関係のみに押し込めることはその明白な矮小化にあたり、許されないものなのである。

しかし一方でヴィッパーマンは論争当初からゴールドハーゲンが歴史議論において果たしうる役割を高く評価しており、パネルディスカッション等で同席し「ゴールドハーゲンはわが国の政治文化に貢献した」<sup>(15)</sup>と発言するなど、メディア上でも積極的に活動し彼に肯定的な立場をとっていた。ヴィッパーマンは歴史家論争やドイツ統一を経て右派の歴史修正主義が氾濫している状況への危機感を最も強く表明していた人物の一人であり、ゴールドハーゲンをそのような潮流への対抗馬と捉えたのである。

彼は著書の中で、ナチズムの「近代性」を称揚する理論や地政学的な「悲劇的中間位置」を根拠に第二次大戦を不可避の自然発生的事象あるいは「予防戦争」と位置付ける理論が勢力を盛り返して来

ていることを嘆いている。彼によれば、これには歴史修正主義への欲求のみが原因ではなく、ナチズムとホロコーストに対して非人格的な説明を適用する「機能派」にも多大な責任があった。東ドイツの崩壊後、これと第三帝国を比較して相似視しようとする論者が増えており、中にはサダム・フセインとヒトラーとの比較すら登場している。「全体主義理論」の復刻版ともいえるこれらのテーゼに対して、比較を必ずしも否としない「機能派」の構造主義的理論、その「ユダヤ人迫害についてのきわめて無味乾燥で無感動な叙述」<sup>(16)</sup>が、歴史に対する社会の関心の高まりに応じておらず、これらの「免罪」的な理論の横行を許していると彼は考えていた。ドイツ統一によって、ドイツの保守論客たちは「全東ヨーロッパ、それどころか全『ユーラシア空間』に、将来ドイツが支配権を打ち立てるといふこの夢」<sup>(17)</sup>に支配されていたのである。

従ってゴールドハーゲンが登場したとき、ヴィッパーマンは彼を、この「夢」からドイツ人を引き戻す役割を担う人物であると捉えたのである。ゴールドハーゲンの単一原因論的動機テーゼもまた、機能派や意図派の対立の中で硬直化した専門的議論に「倫理的な（罪の）問題」を突き付け、「ドイツの専門家が示すべきだったのに、これまでほとんど示されることがないものを示した、一つの挑戦」<sup>(18)</sup>であった。彼はゴールドハーゲン論争を、専門的研究者の立場から最も一般読者に寄り添った姿勢で紹介した、高い伝達力と影響力を持つ人物の一人であったといえよう。彼はゴールドハーゲン論争を、ドイツにおける左右の「文化ヘゲモニー」<sup>(19)</sup>をめぐる終わりなき争奪戦の一環と評価しており、その限りにおいてゴールドハーゲンの問題提起を全面的に肯定している。

このように、独自のラディカルな視点を持ち批判精神に富むヴィッパーマンも、ゴールドハーゲンのもたらした影響の意義（とりわけ政治的なもの）を否とすることはなかった。ドイツの左派論客にとってゴールドハーゲンはその学術的水準に拘らず、ホロコースト解明への熱意やデモクラシーへの誠実さについては疑う余地もない自分たちの代弁者だったのである。

## 「反シオニスト」フィンケルスタイン

論争当時、ゴールドハーゲンの問題提起すなわち「政治的功績」に異が唱えられることはほとんどなかった。政治的現象としてのゴールドハーゲン論争には、記念碑論争等の影響によってドイツ民族主義および反ユダヤ主義（≒歴史修正主義）対多文化主義（≒デモクラシー）という対立軸が基層に在り、独米に留まる範囲で終息した論争のなかで、その構図はヴィッパーマンにおいてもさほどの矛盾なく成立していた。そのなかでほとんど唯一の例外とも言うべき人物が、非常に戦闘的な反シオニズム論客として知られるフィンケルスタインである。

フィンケルスタインは、ゴールドハーゲンと同様にホロコースト生還者を両親に持つアメリカ人研究者である。彼はホロコースト被害者の子孫としての立場から、アメリカおよびイスラエルのエリート層ユダヤ人によるホロコーストの被害やその記憶の利用を強く糾弾する論者として知られており、スイス銀行ユダヤ人資産の不平等な配分と悪用を糾弾する『ホロコースト産業』<sup>(20)</sup>、ハーバード法学教授アラン・ダーショウィッツによるイスラエル・パレスチナ紛争についてのイスラエル擁護を糾

弾する『イスラエル擁護論批判』<sup>(21)</sup>といった著書がある。

フィンケルスタインが広く知られるようになった契機は、イスラエルのジャーナリスト出身史家であるジョーン・ピーターズの著書『ユダヤ人は有史以来』<sup>(22)</sup>に対する徹底的糾弾である。『ユダヤ人は有史以来』は、イスラエル建国以前のパレスチナ各地にはほとんど住民がおらず、現在「パレスチナ人」と呼ばれている人々は建国後に流入してきたアラブ系住民に過ぎないという事実を解き明かしたと主張する大著であり、当時の著名なユダヤ系論者・親イスラエル論者の推薦や賛辞を多数受けていた。極めてラディカルな論客としてキャリアを開始したフィンケルスタインは、特に2000年代にイスラエルの占領政策やアメリカの中東政策をめぐる論戦のキーパーソンとなり、とりわけダーショウィッツとは激しく対立した。『イスラエル擁護論批判』の出版やデポール大学での終身権獲得をめぐる圧力をかけられ、終身権が土壇場で否決されるなどアメリカにおける学問の自由のありかたにまでその影響は波及した<sup>(23)</sup>。

フィンケルスタインはその知名度に反して（あるいは比例して）、大半のホロコースト研究者から否定的な評価しか受けていない。ルース・B・バーンとの共著 *A Nation of Trial*<sup>(24)</sup> に推薦文を寄稿したクリストファー・ブラウニング<sup>(25)</sup> は、バーンとフィンケルスタインの「真剣さと意思の強さ」、「勇気ある、誠実な、労をいとわぬ努力」を称賛しつつも、「フィンケルスタインの、ホロコーストのヒストリオグラフィーの政治化にまつわる主張には一切同意しない」と断りを入れている。一方で、『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』<sup>(26)</sup> の著者ラウル・ヒルバーグや、アメリカ左派の象徴的人物チョムスキーなどは、フィンケルスタインの言論活動に一定の肯定的評価を与えている<sup>(27)</sup>。

このようなフィンケルスタインの人物像には、ドイツにおけるゴールドハーゲンに重なるものがあると言えよう。岡野内はゴールドハーゲンとフィンケルスタインの登場をともに国際的な「正義回復」の潮流のあらわれと位置付け、ホロコーストとナクバ（パレスチナ人迫害）をともに「正義」の観点から並置するという、ドイツに留まらない規模の歴史的パラダイム転換が起きたと述べている。

そしてこのフィンケルスタインは、ある点でゴールドハーゲンやヴィッパーマン以上のラディカルさをもって論争に参加した数少ない人物となった。

1998年の *A Nation on Trial* は、フィンケルスタインが1997年にイギリスの政治誌 *New Left Review* に掲載したオンライン記事 *Daniel Jonah Goldhagen's Crazy Thesis*<sup>(28)</sup> をもとにしている。記事の中で彼は、ゴールドハーゲン論争の他の論者と同様の学術的批判を展開したが、結語部において彼独特の主張を述べた。ゴールドハーゲン論争は、様々な点でフィンケルスタインがかつて徹底的に批判した『ユダヤ人は有史以来』の出版をめぐる状況と似通っている。研究者になりたての著者が専門研究のエスタブリッシュメントを挑発するような主張を行う、それに対して必ずしも専門研究者でない著名な人物が手放しの賛辞を送る、堅実な実証的反論がネグレクトされる、などである。さらに彼はゴールドハーゲンの反ユダヤ主義テーゼを、ピーターズのイスラエル擁護と似通った「戯画化された古臭いシオニスト・テーゼ」<sup>(29)</sup> と評した。

フィンケルスタインは、ホロコーストにまつわる議論を二つの理念型に分けて論じている。中立的かつ実証的で外部からの批判や干渉に耐えうる建設的な「ホロコースト研究」と、情緒的でメッセージ伝達の役割を主とし、それ故に恣意的な操作可能性の高い「ホロコースト文学」である。彼は『普通のドイツ人とホロコースト』を、明白に後者に位置付けられるとした。彼はゴールドハーゲンを『ユダヤ人は有史以来』と比較したことで、ゴールドハーゲン論争にみられた他のいかなる批判とも異なる、そしておそらくは最もラディカルな糾弾となったのである。

フィンケルスタインのゴールドハーゲン論争に対する独特な解釈は非常に激烈で、またそれ自体必ずしも学術的なものであったともいえない。しかし、それに対するゴールドハーゲンの応酬もまた、非常に感情的で激しいものとなった。彼は同年のうちに *Frankfurter Rundschau* に *The New Discourse of Avoidance*<sup>(30)</sup> と題した論文を掲載し、フィンケルスタインに反論している。

彼の論調はドイツの観客や視聴者に見せた穏和な印象と著しく異なって非常に激しいもので、アメリカの親イスラエル系論者たちに倣ってフィンケルスタインを「反シオニスト」と呼びその政治的態度を批判した。そしてあたかもゴールドハーゲンに「典型的なユダヤ人の報復感情」<sup>(31)</sup>を見出した論争初期の保守的批判者たちの如く、「フィンケルスタインの両親がホロコースト生還者であることを正当性の根拠と見なして、シュピーゲル紙は注意不足の読者たちに向けて、『この（フィンケルスタインによる）論難において、フィンケルスタインに秘めた動機が存在しない（反ユダヤ主義者ではない）ことは確実だ』と告げている」（括弧内は執筆者）と述べたのである。

この激しいやり取りには、おそらく90年代のゴールドハーゲンの発言においてもっとも激しく攻撃的なものを見ることができる。ゴールドハーゲンがフィンケルスタインに対して見せた態度からは、ドイツとは異なる舞台の存在が見えてくる。なぜ彼らは、ホロコーストの加害者についての論争に際してシオニズムの是非を論じているのか。また、なぜ他の論者ではなく彼だけがそのことを論じているのか。後述するように、アメリカでは、ホロコーストをめぐる政治的文脈にはイスラエル（への賛否）及びシオニズム（の是非）という観点が不可分となっている。ゴールドハーゲン論争は専らドイツでの政治的論争あるいは独米での学術的論争であったが、ここではアメリカでの政治的論争の要素が一瞬だけ顔を覗かせたのである。

ゴールドハーゲンは論争当時、ドイツにおけるホロコースト研究という限定的な文脈を離れた国際的な話題について具体的な発言を行うことはほとんどなく、専ら抽象的にデモクラシーの支持者・擁護者として価値中立的な姿勢を堅持していた。すなわち彼自身の「民主国家」観がどのようなものを説明することがないまま、彼の「自発的死刑執行人」テーゼも好意的に受け止められ、「民主国家」の功労者となったのである。一方で、フィンケルスタインとのやり取りを通じて、ゴールドハーゲン個人の政治的価値観は既に明白に表明されていた。ゴールドハーゲン論争とその影響について分析する際、彼のこのような価値観とその背景にあるはずのアメリカでのホロコースト議論の枠組みを無視してしまうことは不適切であろう。

## “Political Islam” と “Global Antisemitism”

ゴールドハーゲンは論争後、大学のポストを辞し執筆活動に専念する生活を送っている。2009年出版の *Worse than War*<sup>(32)</sup> は、広島・長崎への原爆投下にはじまり、ホロコーストを含む世界各地のジェノサイドについて網羅的に記述し、そこに通底する“Eliminationism” “Exterminationism”（後者は前者の過激化した形態。望月（2007）による訳では「抹殺主義」および「絶滅主義」）の諸様相とそれに対処するためのアプローチを提言した大著であり、ゴールドハーゲン論争で寄せられた、諸ジェノサイドの無視という批判に応えたものといえる。

しかし内容を吟味すると、ホロコーストの別格性は依然として堅持されており、シンティ・ロマなど非ユダヤ人の被害者集団についても、あくまで扱いは副次的なものにとどまっていることが明らかである。そして注目すべきことに、彼は現代世界においてとりわけ強勢な抹殺主義の主体として“Political Islam”（政治的イスラム）という概念を挙げる。これは、ドイツの反ユダヤ主義同様に、イスラム文化の根底に起源を持ちアル・カーイダやその「支援者」サダム・フセイン等へと連なる反ユダヤ主義の系譜であり、中東諸国における人権侵害と平和への脅威の主因とされる。彼は国連の無力と偏向を指摘し、これに依拠しない形での武力介入を含むジェノサイド抑止を求めている。必然的に彼は米国主導の有志連合によるジェノサイド抑止を強く支持しており、多国籍軍占領下イラクで発生したアブ・グレイブ捕虜収容所における虐待事件について「許されざるべき罪」であるとしながらも、「戦争それ自体の正しさやその戦略的ゴールの正しさ」と、アメリカ人にとっていかに戦うことが正しいか、という問題を当事者たちが「混同してしまった」<sup>(33)</sup>、と述べている。また彼は、イスラエルについて、その市民が日々反ユダヤ主義テロリズムの犠牲となっており、それどころかイスラエル国家全体がその抹殺主義の被害国となる危険がある、という懸念を表明している。他方彼は絶滅主義や抹殺主義の分類や具体的事例を大量に列挙しているが、イスラエル建国時のアラブ系難民の発生を「追放」（排除主義の一分類）の事例としているほかは、パレスチナに関する言及はみられない。

更に2013年には議論の対象をふたたび反ユダヤ主義に絞った、*The Devil That Never Dies*<sup>(34)</sup> を出版した。そこでは「イスラエルの現実あるいは仮想の欠点や罪にフォーカスしながら近隣諸国のよりいっそう悪質な犯罪を無視、擁護、隠蔽すらして反イスラエルの立場をとることは反ユダヤ主義的か」という問いを「拒絶する人々がいる」<sup>(35)</sup>と述べ、“Global Antisemitism”の語を用いて、いわゆる「新たな反ユダヤ主義」型の世界観を展開する。政治的イスラムは更に重大な脅威と認識され、その主たる標的は依然としてイスラエル及び中東諸国のユダヤ系市民である。穏健なムスリムへの具体的な言及は驚くほど少なく、むしろ彼にとって政治的イスラムという語には、反ユダヤ主義が過激派のみに留まらない裾野を有していることを示唆する意図が込められていると見るべきであり、パレスチナ問題やイスラエルの具体的分析の欠落とも相まって強烈なイスラム脅威論となっている。

このように現在ではゴールドハーゲンの現代世界に対する立ち位置が鮮明に表明されている。そこでは皮肉にもヴィッパーマンがドイツの歴史修正主義に対して嘆いたフセインとヒトラーとの比較が

語られ、フィンケルスタインが指摘した親シオニスト的心情、それも極めてネオコン<sup>(36)</sup>的なそれに近いものが見てとれる。後年の著作から論争当時の著者の価値観や行動基準等を適宜的に類推することには慎重であるべきだが、やはりドイツの「過去の克服」<sup>(37)</sup>において大きな役割を果たしたゴールドハーゲンが後にこのような言論を展開しているという事実は見逃せない。

## アメリカのホロコースト議論からみるゴールドハーゲン

イスラエル擁護、イスラムの危険視、ユダヤ系左派への敵視といった要素の揃ったゴールドハーゲンの2000年代以降の主張は、もとよりドイツのホロコースト議論の枠組みに収まるものではない。ゴールドハーゲンはユダヤ系アメリカ人であり、その現代国際政治の解釈は明白にネオコン的なものである。時期が一致しているわけではないため慎重な分析が必要ではあるが、このような論者がドイツにおいてリベラル派の象徴として持て囃されたことはゴールドハーゲン論争の極めて興味深い側面である。これまでのゴールドハーゲン論争に関する論考は管見の限りドイツの政治文化の文脈か純学術的なホロコースト研究の枠内に留まっており、アメリカのホロコースト議論やゴールドハーゲン個人のその後の主張が関連付けて語られることはなかった。

アメリカのホロコースト議論の最大の特徴は、それがパレスチナ問題と不可分である点にある。ユダヤ系人口の多さとユダヤ人コミュニティの活発さは、超大国としてのアメリカのプレゼンスを背景に、アメリカの積極的な中東外交とそこで発揮される強烈な親イスラエルの姿勢に反映されてきた。他方でユダヤ系移民における多文化主義の伝統やサイドをはじめとしたアラブ系・ムスリム系移民の存在、何よりイスラエルへの注目度の高さからかえってイスラエル批判やポストコロニアリズムの浸透も進んでおり、先述のフィンケルスタインはそういったユダヤ系左派の急先鋒といえる。アメリカのとりわけユダヤ系やアラブ系の知識人がホロコーストについて語る時、必ずといっていいほどそこにはイスラエル、シオニズム、パレスチナといった諸要素が併存している。このような文脈にあるアメリカのホロコースト議論は必然的に政治対立・イデオロギー対立の色彩を強めてきたのである。その事例として、あまりにも著名なサイドやチョムスキーの言論活動や、先述のフィンケルスタインとダーショウィッツの対立等が挙げられるが、とりわけネオコンとの関連ではダニエル・パイプスと彼の関与するプロジェクト「キャンパス・ウォッチ」が知られている。

ポーランド・ユダヤ系アメリカ人のパイプスは主要なネオコン論客の一人として頻繁に言及される著述家である<sup>(38)</sup>。キャンパス・ウォッチは彼が代表を務める「中東フォーラム」のプロジェクトの一つで、中東問題の記事や論文、各地の学生によるレポートをWebサイト<sup>(39)</sup>上に掲載している。プロジェクトの解説<sup>(40)</sup>によれば、北米の中東研究は「分析上の過誤」「過激思想」「不寛容」「擁護論」「学生への権力行使」といった問題を抱えており、プロジェクトの活動は研究者や研究機関の「分析」や学生からの告発の収集と調査を通じてこれを是正することである。「分析上の過誤」には「パレスチナ人を、民主主義を達成しうる存在とみなす」ことなどが含まれ、「不寛容」とは「中東の専門研究が保守や穏健リベラルを排除した左派一色で占められている」ことを指し、「擁護論」には「各国国

営メディアにおける反米・反クリスチャン・反ユダヤ主義的言説の流布」を無視していることが挙げられる。プロジェクトの最終目標は、「中東研究家が、戦時において適切な政策指導を学生に行う日が訪れる」こと、「大学のステークホルダーの手に大学を取り戻す」ことである。

このような極端な主張を参照した後では、ゴールドハーゲンの議論は独自色の薄い、大人しいものに見えるかもしれない。彼はイスラムやイスラエル・パレスチナ等への眼差しにおいて、必ずしも高い独自性を持っているとはいえず、シオニスト系の論客の中でも影響力があるとは言えない存在である。

だが、彼の主張には他のネオコン論者とは異なる点も少なくはない。彼は他の論客について論じる際、「反ユダヤ主義者」「絶滅主義者」のようなホロコースト関連の用語を専ら用い、「保守」「リベラル」「左派」<sup>(41)</sup>といったレッテルをほとんど用いない。先述のパイプスなどの左派敵視とは対照的といえ、ユダヤ系親イスラエル論客に必ずしもそのような傾向があるわけではない。また、その主張における最大の特徴はやはりホロコースト比較不能論の撤回である。アメリカにおいてもドイツにおいてもユダヤ系論客の多くが堅持してきた比較不能論は90年代の彼自身が主張していたところであったが、2000年代のゴールドハーゲンは逆にあらゆるジェノサイド事例の比較を称して、その頂点としてホロコーストを別格のものとして扱っている。

これらの特色は、どのように解釈すべきだろうか。可能性の一つは、彼がドイツでリベラルな人物として喝采を受けたという経歴の影響である。

彼が「左派」等の用語を用いないことに関しては、イスラエルに批判的な左派をも「反ユダヤ」と断定した結果として、最早彼が左右という判断基準を捨て去った、という説明も可能かもしれない。しかし現在のアメリカではパイプスの例に見られるように親イスラエルの立場がネオコン陣営に回収されつつあるという現状を踏まえると、ゴールドハーゲンの態度保留はドイツで知名度を獲得した彼自身の自己規定がまだ「リベラル」であるが故であって、アメリカの左右の論戦における自身の立場を巡る葛藤がそこに現れていると解釈することもできるのではないか。無論、単にネオコンやシオニズムに距離を取る読者に訴えかけようとしているに過ぎないという見方もできるが、いずれにせよゴールドハーゲンの文章からは、いまだ親シオニズムを左右どちらかにひとくくりにはできないアメリカの複雑な状況が窺われる。

一方ホロコースト比較不能論の撤回と諸ジェノサイドの比較は、明白にイスラム脅威論のために近年のホロコースト研究やジェノサイド研究を援用しているものである。国連をはじめとしたジェノサイド議論の場においてはその草創期からホロコーストとナクバが関連して語られてきており、それに対応して親イスラエル知識人はホロコーストの比較不能性を声高に主張してきたが、ゴールドハーゲンはむしろ比較研究という形をとってイスラム脅威論を確立している。すなわち、比較によってイスラム主義とナチズムとの類似性をより自然に、効果的に論じることをも可能としているのである。ゴールドハーゲン論争当時、彼に対するリベラルな側からの批判者には、バーンを筆頭に比較研究を肯定的に捉える人々が存在した。ゴールドハーゲン本人の当初の意に反して論争はむしろ比較研究の



重要性への認識を強める方向にも働いたのであり、渦中の人物であったゴールドハーゲンがその潮流を最も強く感じていたことは想像に難くない。

### おわりに：独米の比較を通じて

ゴールドハーゲンの言論を分析することにより、ドイツとアメリカそれぞれのホロコースト議論の特性と相違点、それらに起因する相関関係が見出される。ドイツとアメリカそれぞれの社会的文脈を比較することで、「リベラル」や「保守」の位置付け・内容が大きく異なり、ある点では逆転していることがわかるのである<sup>(42)</sup>。

ドイツのホロコースト議論においては、左派とはナチス・ドイツの犯罪を誠実に分析し、ナチ犯罪相対化の試みに反撃してデモクラシーを守護する立場を意味した。これに対し、アメリカにおける左派には北米先住民へのジェノサイドなど植民地勢力による多様な犯罪をポストコロニアルな視点から論じる人々があり、それゆえホロコーストをそれらの事例と比較不可能な別格のものとして論じることには強い抵抗が示されてきた。

このようにある面では対照的な両国の左右の構図を比較すると、それぞれの「リベラル」から発した議論がそれぞれの「保守」に援用されるという様式が存在が窺われる。ホロコーストやナチズムを他の事例と比較し研究することは、ある程度は冷戦構造から生まれた保守的な議論の産物であったとも言えるが、一方では第三世界に強い関心を持ちホロコーストとパレスチナ問題とを同時に意識せざるを得ないアメリカの左派やポストコロニアル系知識人の要請に見合ったものであった。そのような、ヨーロッパによる植民地主義の批判につながるものでもあった比較研究が、ドイツの歴史家論争においてはナチ犯罪の相対化の意図をもって援用されることとなったのである。また90年代のドイツでクローズアップされた、加害者の残虐性とイデオロギーの浸透度の関連性といった問題はまさにゴールドハーゲンその人によってイスラム脅威論に転化されているし、彼に限らず原理主義的なイデオロギーのみに集束して歴史的経緯を無視したイスラム論は既に広く普及している。更にゴールドハーゲンの論においては、ドイツにおいてゴールドハーゲン論争を契機に復権した比較研究までもがイスラム脅威論の補強に供されている。

その帰結として、それぞれの「リベラル」における議論はそれぞれの「保守」と対抗するうえで制約を受けることとなる。ドイツにおいては、ヴィッパーマンの主張からみたように非ユダヤ人犠牲者への関心の歴史は浅く、ホロコーストとパレスチナの関係に至っては議論の俎上に上ることがほとんどないことはゴールドハーゲン論争においても観察できる。ドイツのポストコロニアル的議論としてのドイツ領南西アフリカにおけるジェノサイドについての議論も、緒についたばかりである<sup>(43)</sup>。逆にアメリカのポストコロニアル的な左派に対しては、パイプスを引用するまでもなく常に中東諸国や旧植民地諸国での人権抑圧の軽視や免罪といった批判が大量に寄せられている。

このような各国の言論の相互関係を意識することで、ジェノサイドをはじめとする人道に対する罪（とりわけ現行の出来事）に関する議論をより深めることができるといえよう。各国の議論それぞ

れに固有の陥穽が存在するのであり、それらはゴールドハーゲン論争のような交錯点を通じた比較によって、よりいっそう鮮明に観測することができるのである。

- 注(1) Schoeps, Julius H., *Ein Volk von Mördern? Die Dokumentation zur Goldhagen-Kontroverse um die Rolle der Deutschen im Holocaust*, Hamburg 1996.
- (2) Heil, Johannes / Erb, Rainer (Hg.) *Geschichtswissenschaft und Öffentlichkeit. Der Streit um Daniel J. Goldhagen*, Frankfurt am Main 1998.
- (3) Shandley, Robert R., *Unwilling Germans? The Goldhagen Debate*, Minneapolis, 1998.
- (4) 大石紀一郎「ゴールドハーゲン論争と現代ドイツの政治文化——挑発、演出、そして〈歴史〉と〈記憶〉の闘いについて (〈現在〉における〈過去〉)」(『ドイツ研究』24, 日本ドイツ学会, 1997年)。
- (5) 佐藤健生「ホロコーストと『普通の』ドイツ人—『ゴールドハーゲン論争』をめぐる—」(『思想』877, 岩波書店, 1997年)。
- (6) 小野寺拓也「歴史研究の『ミクロ過程論的転回』—『ゴールドハーゲン後』のナチズム・ホロコースト研究」(『歴史学研究』840, 青木書店, 2008年)。
- (7) 仲正昌樹「ゴールドハーゲン論争とナチズム研究の行方」(『歴史評論』577, 校倉書房, 1998年)。
- (8) 芝健介「ホロコーストと歴史学: ゴールドハーゲン論争のあとさき」(『史論』61, 東京女子大学, 2008年)。
- (9) 岡野内正「パレスチナ問題を解く鍵としてのホロコースト (ショア) とナクバに関する正義回復 (リドレス)」(『アジア・アフリカ研究』48・49, アジア・アフリカ研究所, 2008・2009年)。
- (10) Goldhagen, Daniel J. *Hitler's Willing Executioners, Ordinary Germans and the Holocaust*, New York, 1996. ダニエル・J・ゴールドハーゲン『普通のドイツ人とホロコースト—ヒトラーの自発的死刑執行人たち—』望田幸男監訳, ミネルヴァ書房, 2007年。
- (11) Wippermann, Wolfgang, *Wessen Schuld? Vom Historikerstreit zur Goldhagen-Kontroverse*, Berlin 1997. ヴォルフガング・ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論争—ドイツ「再」統一とナチズムの「過去」』増谷英樹訳, 未来社, 1999年。
- (12) Wippermann, Wolfgang, *Umstrittene Vergangenheit. Fakten und Kontroversen zum Nationalsozialismus*, Berlin 1998. ヴォルフガング・ヴィッパーマン『議論された過去—ナチズムに関する事実と論争』林功三, 柴田敬二訳, 未来社, 2005年。
- (13) ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論争』, 22頁。
- (14) 「虐殺されたヨーロッパ・ユダヤ人のための記念碑」建設に際しての論争については, 川合全弘『再統一ドイツのナショナリズム—西側結合と過去の克服をめぐる—』ミネルヴァ書房, 2003年を参照。
- (15) 大石, 前掲論文, 92頁。
- (16) ヴィッパーマン『議論された過去』, 189頁。
- (17) ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論争』, 213頁。
- (18) ヴィッパーマン『議論された過去』, 190頁。
- (19) ヴィッパーマン『ドイツ戦争責任論争』, 214頁。
- (20) Finkelstein, Norman G., *The Holocaust Industry: Reflections on the Exploitation of Jewish Suffering*, New York, 2000. 『ホロコースト産業—同胞の苦しみを「売り物」にするユダヤ人エリートたち』立木勝訳, 三交社, 2004年。
- (21) Finkelstein, Norman G., *Beyond Chutzpah – On the Misuse of Anti-Semitism and Abuse of History*, Berkeley, 2005. 『イスラエル擁護論批判—反ユダヤ主義の悪用と歴史の冒瀆』立木勝訳, 三交社, 2007年。
- (22) Peters, Joan, *From Time Immemorial: The Origins of the Arab-Jewish Conflict over Palestine*, New York, 1984. ジョーン・ピーターズ『ユダヤ人は有史以来—パレスチナ紛争の根源』滝川義人訳, サイマル出版会, 1988年。
- (23) <http://www.nytimes.com/2007/06/11/arts/11depa.html> (2015年9月25日)

- (24) Finkelstein, Norman G./Birn, Ruth Bettina, *A Nation on Trial: The Goldhagen Thesis and Historical Truth*, New York, 1998.
- (25) ホロコースト研究者。現場加害者の動機付けに関する研究に Browning, Christopher, *Ordinary Men: Reserve Police Battalion 101 and the Final Solution in Poland*, New York, 1992.
- (26) Hilberg, Raul, *The Destruction of the European Jews*, Chicago, 1961. ラウル・ヒルバーク『ヨーロッパ・ユダヤ人の絶滅』望田幸男, 原田一美, 井上茂子訳, 柏書房, 1997年。
- (27) [http://www.democracynow.org/2007/5/9/it\\_takes\\_an\\_enormous\\_amount\\_of](http://www.democracynow.org/2007/5/9/it_takes_an_enormous_amount_of) (2015年9月25日) 及び <http://www.chomsky.info/books/power01.htm> (2015年9月25日)
- (28) Finkelstein, Norman G. Daniel Jonah Goldhagen's 'Crazy' Thesis: A Critique of Hitler's Willing Executioners. (*New Left Review*, Nr.224, London, July 1997, p. 39-88.) <http://vho.org/aaargh/engl/crazygoldie/FINKEL1.html> (2015年9月25日)
- (29) Finkelstein, Daniel Jonah Goldhagen's 'Crazy' Thesis
- (30) Goldhagen, Daniel J., *The New Discourse of Avoidance*. (*Frankfurter Rundschau*, Frankfurt, August 18, 1997) <http://web.archive.org/web/20021204232909/http://www.goldhagen.com/nda0.html> (2015年9月25日)
- (31) ヴィッパーマン『議論された過去』, 32頁。
- (32) Goldhagen, Daniel J., *Worse Than War. Genocide, Eliminationism, and the Ongoing Assault on Humanity*, New York, 2009.
- (33) Goldhagen, *Worse Than War*, pp. 251.
- (34) Goldhagen, Daniel J., *The Devil That Never Dies: The Rise and Threat of Global Antisemitism*, New York, 2013.
- (35) Goldhagen, *The Devil That Never Dies*, pp. 8
- (36) ここでは2000年代のブッシュ政権内外においてアフガン侵攻やイラク戦争等を主導・支持したとされる知識人・政策立案者集団の掲げるイデオロギーを Neoconservatism と位置付ける。ネオコン及び「イスラエル・ロビー」と両者の関係を分析した研究として Mearsheimer, John J. / Walt, Stephen M. *The Israel Lobby and U.S. Foreign Policy*, New York, 2007.
- (37) “Vergangenheitsbewältigung” 「過去との取り組み」とも。包括的な研究に石田勇治『過去の克服—ヒトラー後のドイツ』白水社, 2002年。
- (38) Mearsheimer/Walt, *The Israel Lobby*, pp. 129.
- (39) <http://www.campus-watch.org/> (2015年9月25日)
- (40) <http://www.campus-watch.org/about.php> (2015年9月25日)
- (41) 本稿では紙幅の余裕がないため、「リベラル」や「保守」などの概念について厳密な定義を行っていない。加えて、そもそも本稿は地域や国の文脈において、これらの概念が実際にいかに位置づけられているか、その実態に注視したものである。
- (42) 「リベラル」、「保守」などの位置づけは一義的に決まるものではなく、地域や国の間でねじれやずれがあることは従来から指摘されている。その原因としては、一般的には当該地域・国の歴史的背景ならびに政治勢力関係、国際状況等が考えられるが、本稿での結論を踏まえたうえでのその原因の更なる分析は、今後の課題としたい。
- (43) ホロコースト研究とジェノサイド研究を学術的に俯瞰しようとする研究には Stone, Dan, *The Historiography of the Holocaust*. Basingstoke, 2004 など。